



国立大学法人

鳴門教育大学

Naruto University of Education

# 学校の危機管理の実践

## オリエンテーション

鳴門教育大学

客員教授（名誉教授）

阪根 健二

公式キャラクター  
なる★ワン



# 事故（事件）や災害は繰り返される

---

教訓は生かさなくてはならないが、  
これがうまく機能しない。

特に、公的機関は、責任問題という観点から、生かされにくい文化・風土がある。

また、自分は大丈夫だろうというバイアスがかかりやすい。

本授業は、学校の危機的な事態の具体的な事例の分析等を通して、学校危機への事前予防、事後対応の両面について組織的にかつ関係機関等との連携のもとでいかに対応すべきか、その実践的な課題解決策の習得を図ることをねらいとする。そのための分析手法として、「SHELLモデル」（航空機事故・医療などで使われる手法）を活用する。

＊資料（PDF）はWebに掲載します。（ペーパーレスで実施）

Web（シラバス）上にあるリンクをクリックして、資料をダウンロードしてください。（なお、講義2日前までにはリンクを貼っておきます）

**パスワードは、naruto です。**

# (事例) 事故は連鎖する

## 1966年の5つの連続航空事故の場合

全日空羽田沖墜落事故(2月4日)

カナダ太平洋航空機着陸事故(3月4日)

BOAC機富士山空中分解事故(3月5日)

日本航空羽田空港離陸訓練事故(8月26日)

全日空松山沖着陸復航墜落事故(11月13日)

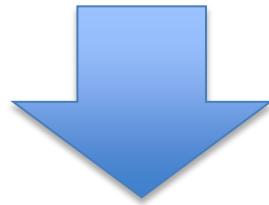
多くが原因不明(不確実)、パイロットミスが疑われている。

# CFIT (シーフィット) (Controlled Flight Into Terrain)

耐空証明を受け問題のない航空機が、問題のない操縦士によって操縦されている場合に、衝突の可能性に気付かないまま、山や地面、水面、障害物等に衝突する事故のこと。多くはパイロットの操縦ミスや、状況に対する誤った操縦に起因する。

**教訓→ 対地接近警報装置 (GPWS)  
空中衝突防止装置 (TCAS)**

疲労や睡眠不足などによるパイロットの注意力の低下や方向感覚の喪失  
急ぎの意識が思い込みを作る



**本来の状況認識**・・・何かが起こっている  
ことに気づき(レベル1), 何が起こっている  
のかを把握し(レベル2), これからどうなる  
のかを予測する(レベル3)

# 状況認識を喪失

ステップ1のエラーは、知覚できない、誤って知覚する

ステップ2のエラーは、知覚された情報の意味がわからない、もしくは誤って解釈する

ステップ3のエラーは、理解された状況の危険性や緊急性を予知できない



プレッシャー下におけるワークロードの増加  
**各種のバイアス等の心理学的なメカニズム**



# 落ち入りやすいエラーの本質

## 確証バイアス

自分にとって都合のよい情報ばかりを集めてしまう（認知バイアスの一種：思い込み）

## ヒューリスティック的なバイアス

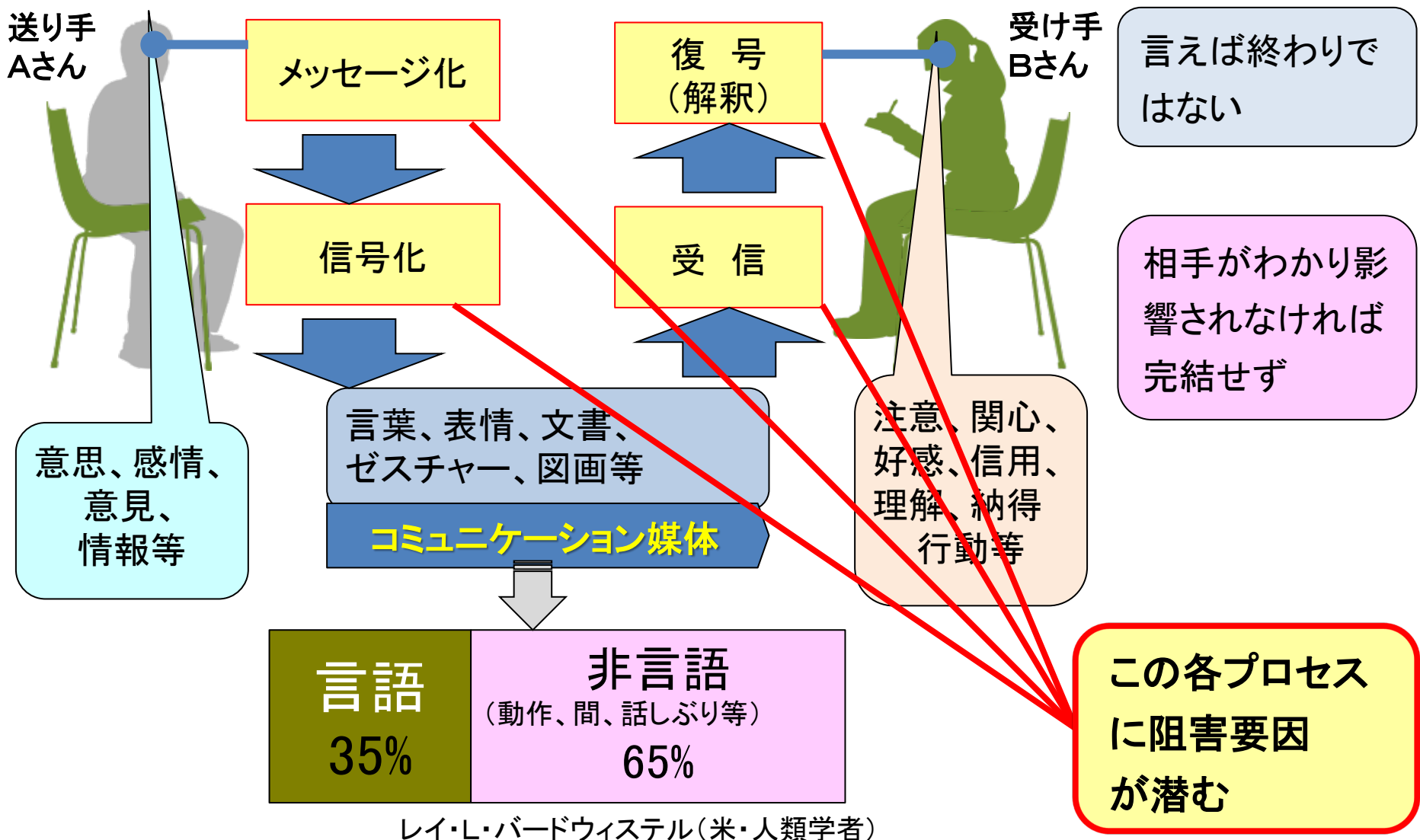
いつも正解するとは限らないが、おおむね正解するという直感的な思考であり、「思い出し易いものは、確率や頻度が高いもの」という経験則的な判断

ブリーフィング（Briefing）は、  
情報や行動の確認において、た  
ちまちの安全に重要である。ビ  
ジネスでも重視されている。

クリティーク（Critique）による  
批評や評価は、自分の判断や行  
動を振り返ることで、今後につ  
ながる → CRM

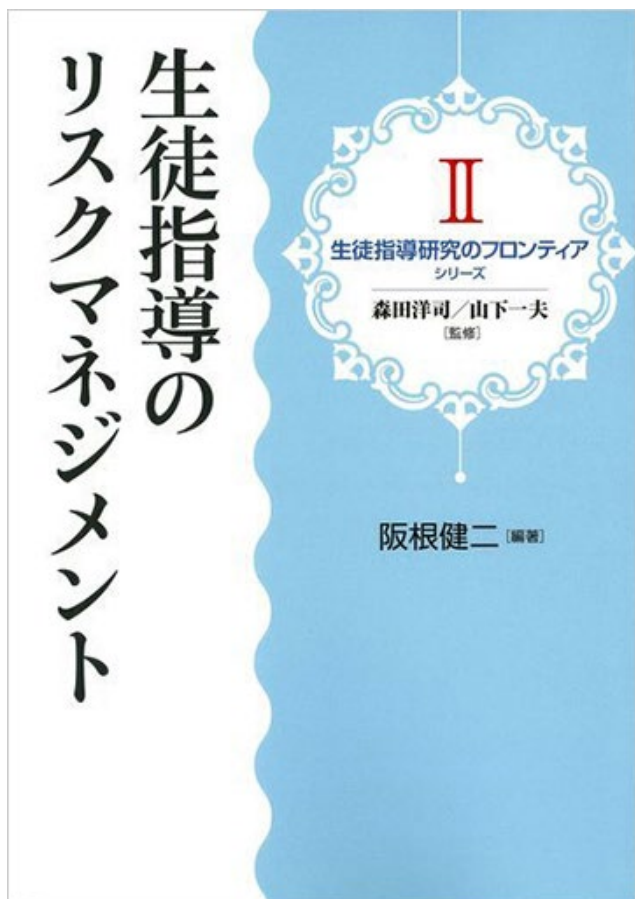
# コミュニケーションのプロセス

海上自衛隊徳島教育群資料



# 参考文献 （課題に対して俯瞰するために）

## 生徒指導のリスクマネジメント



森田洋司・山下一夫 監修／阪根健二 編著

A5判 152ページ

定価（本体2,000円＋税）

ISBN978-4-7619-2615-1

小・中・高校教師，教育委員会指導主事

生徒指導における危機管理の概要を説明した上で、「いじめ」「インターネット依存」「不登校」など各課題の専門家が個々の事案について解説。理論をベースにした実践も紹介。

学事出版（2020）

# 参考文献 （新たな視点を意識するために）

## なぜかいじめに巻き込まれる子どもたち



川上敬二郎 推薦 阪根健二(鳴門教育大学)  
TBS記者、NスタNEWS23・サンデーモーニングなどでディレクターやデスクを経て、現在『報道特集』ディレクター

ポプラ社 (2023/12/6) 新書 272ページ  
ISBN 978-4591179970 1.012円(税込)

いじめは1980年代から大きな社会問題となり、悲劇が続いている。ブラック勤務ともいわれる厳しい勤務状況の中、教職員など教育関係者たちも必死に対策を練ってきた。だが何かが足りなかった。そう言わざるを得ない。

足りないのは何なのか。教育専門家でも文科省職員や学校関係者でもない“第三者”による“外野の声”にも耳を傾けてみてはどうか。必読の書である。